Osaka Shoin Women's University Repository

大阪樟蔭女子大学研究紀要第１号（2011）

精神障害者を保護者にもつ子どもの心のケアについての基礎的研究

心理学部　臨床心理学科　西　　友子
発達教育心理学科　川上　正浩

近年、メンタルヘルスに関する関心が高まっている中、その健康を損なっている者の数は増加の一途をたどっている。それは年齢に関係なく生じている現象で、大きく社会的に影響を与えているのは周知の事実であろう。しかし、精神病に罹患した保護者をもつ子どもの葛藤やストレスなどの心的な影響についての研究はほとんどなされていない。そこで本研究は、精神障害者を保護者に持つ児童・生徒に対する支援プログラムを作成するためにも、精神障害者を自分の養育者としてもつ子どもの、心理面での現状の把握を行うための調査を行い、さらには、そのトラウマとなっている部分へのケアを含めた支援体制の構築を目指すことを目的としてすすめた。

筆者は、約５年前よりスクールソーシャルワーカーとして小･中学校に派遣され、問題があるといわれている児童・生徒の支援にあたっている。その活動の中で、精神障害をもつ保護者をもつが故に当該児童･生徒の生活のしづらさや心的発達の偏りがあることがわかり、それは、精神障害者の養育の問題だけではなく、別のところに因由する何かがあることが推測された。換言すると、保護者の障害そのものの理解や、障害受容、不適当な愛着の障害などである。

調査方法としては、精神障害者を保護者にもつ子どもに対し、成人し、ある程度自分の中で感情面での整理のついた者を選び、一部、構造化された質問項目に自由に語ってもらう形式のインタビューを行なった。対象となった者に、研究の趣旨の説明を行い、対象者の生育歴、現状、保護者の疾病とその程度、また、その疾病の変化による対象者本人への影響や当時の感情などについて話してもらうこととした。

結果は、統計的な処理の俎上にはのせられないが、多くの語りの中でほぼ共通して持っていた感情は、「ただ、生活することのみに追われていた」「どうすれば諍いなく過ごせるかを考えていた」「自分を見て欲しかった」などで、保護者との満ち足りた愛着を感じることは少なかったようである。ただし、いずれの場合も、その保護者と関係を絶つことなく生活を続け、保護者の精神障害をいつかの時点で受け入れ、悩み、対応していったことは見てとれた。一方、支援の面においては、大人からの支援を継続的に受けているケースは少なく、孤独感を感じていたということであった。我々の仮説以上に共通して特徴的であったのは、研究の趣旨の説明を行った際に、「このような研究をすることで、今後、一人でも自分たちのような思いをする子どもを助けて欲しい」「自分たちのような経験をした人が他にいるのであれば、会って話をしたい」という声が多くあったことである。しかし、当初の予想以上に語りの中にあった生育歴や感情が複雑で、ある程度構造化されているとはいえ、ナラティブな分析を行うのみでは共通性を客観的に論じることが困難となった。そこで、完全に構造化された質問用紙を用い数値を用いた調査の方がより明確にその共通性や傾向を分析することが出来るのではないか、と考えた。

一方で、この研究とは別に、平成19年度からの手紙によるやりとりや口頭によるカウンセリングや支援を実際に行ってきた当時小学校就学前の児童の事例がある。非常に幼い頃から保護者の精神疾患と関わることになり、発達していく中で様々な経過を辿っていったケースである。保護者の症状の理解、他の親族からの偏見、社会との違和感、発達していく中での受容の過程など、インタビュー対象者の追想による感情と同様のものを見いだせた。これについては、保護者の同意は得ているが、研究倫理規定に照らし合わせた上で、事例の報告とともに、今後の支援プログラムの作成にあたりたいと考えている。